サンティアゴ・デ・ペニャルバ教会堂：工法について

CHURCH OF SANTIAGO DE PEÑALBA: METHOD OF CONSTRUCTION

伊藤 喜彦*

Yoshihiko ITO

The church of Santiago de Peñalba, generally known as an example of *mozarabic* architecture, is the only remains of an hermitage which Saint Gennadius founded in El Bierzo, León, at the beginning of the 10th century. It is also one of the best preserved monuments from the *Repoblación* period of the Duero basin. Besides its fancy horseshoe arches which show certain influence of Cordoban aesthetics, the structural characteristics of this small church demonstrate conservative tendencies still valid since Roman Hispania.

Keywords : *Preromanesque, Spain, Repoblacion, Mozarabic Architecture, vault*

プレロマネスク スペイン レポブラシオン モサラベ建築 ヴォールト

1. はじめに

イベリア半島北西部は、ロマネスク以前のヨーロッパ建築の貴重な作品が多く残される場所としてよく知られている。そのなかでも、10世紀に帰されるサンティアゴ・デ・ペニャルバ (Santiago de Peñalba) の教会堂は、良好な保存状態のみならず、その特異な建築的特徴から、当時の建築の一つのありかたを体現する極めて重要な遺構である。その創設と建設時期については、20世紀初頭のゴメス＝モレーノの説がいまだに最も説得力を持っている。ゲナディウス (ヘナディオ Genadio) によるエル・ビエルソ (El Bierzo) 地域の複数の修道院創設の一環として生まれ (919頃)、その弟子サロモン (Salomon) により現存する教会堂が建設された (931-937) というものである¹。この時期は、コルドバを首都とする後ウマイヤ朝の栄華が頂点に達するアブド・アッ・ラフマーン3世の治世と一致する一方で、アストゥリアス王国がドゥエロ川北岸まで版図を広げ、レポブラシオン (再入植 Repoblación) を本格化させる時期でもある。本論は、当時のスペイン・キリスト教美術の位置づけを巡る長い学術論争から一歩離れ²、このペニャルバ教会堂の建設的特徴を分析・相対化せんとする試論である³。

2. スレートの使用、レンガの不在

ペニャルバ教会堂の建設的特徴を論じるに、まずはその材料について検討をしたい。楣、抱き、迫石、円柱など一部を除き、その壁体を構成するのは、スレートと石灰岩を石灰モルタルで固めた野石積みである。同じ野石積みでも、アストゥリアス建築やその他一部のレポブラシオン建築⁴では、荷重がかかる隅部やバットレスに切石を配しているのが普通だが、ペニャルバではこれらも野石でつくられ、このため現在の石積みが剥き出しの外観ではその粗野な印象がさらに強調されている。もっとも、明らかに周囲と異なる凝灰岩のような質の石材で作られた主扉口上部の隠しアーチも含め、建設当初はしゅくいなどで壁全体が均一に仕上げられていたと推察される (図1)。

興味深いのは、ローマ建築で大きな役割を果たし、その後イスラム・スペインにおいても、アストゥリアスにおいても、基本的な建築材料であったレンガが、サンティアゴ・デ・ペニャルバ、あるいは一般にレオン地方のレポブラシオン建築において、重要視されていないことである。特に、ローマ後のイベリア半島で広く普及していたレンガ造アーチの不在は注目に値する。例えばサン・ミゲル・デ・エスカラダ (San Miguel de Escalada, León) では身廊大壁の上部及びコーニス装飾にレンガが用いられているが、これらの少

* 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻 大学院生・工修

Graduate Student, Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Univ. of Tokyo, M. Eng.

図1 サンティアゴ・デ・ペニャルバ外壁面

図2 サンティアゴ・デ・ペニャルバ内陣クーボラと擬レンガ積塗装
(Diario de León, 2004-5-3)

なくとも一部はローマの遺構から再利用されたものであった⁵。

このレンガの不在を念頭に置いたとき、俄然興味深い現象として見えてくるのが、ペニャルバや、同じく10世紀に帰されるサン・セブリアン・デ・マソーデ (San Cebrián de Mazote, Valladolid) で見られる、レンガ積みを擬した壁面塗装である (図2)。これはレンガ積み仕上げのモデルの存在、その意匠を継承する意思だけでなく、そのための材料が入手不可能であったことを暗示している。この塗装に隠された実際のヴォールトは、壁体のものよりはやや小ぶりの石を石灰モルタルの助けを得て積み上げたもので、その石積みは塗装のリング状のものと一切相関がない⁶。

初期中世ドゥエロ川流域におけるレンガの使用は、一般に西ゴート期に帰される、サンタ・コンバ・デ・バンデ (Santa Comba de Bande, Ourense) やサン・フルクトウオソ・デ・モンテリオス (São Frutuoso de Montélios, Braga) のヴォールト部分などに一部見られるが、それらはアストゥリアス建築に見

られる一般化された使用とは異なり、比較的まれな部類に入る。こうした傾向がイスラム教徒侵入後の混乱期を越えて10世紀まで維持されたとする、ここでレンガが用いられなかったのは、時期的というよりは地域的な特徴を示していることになる。そうだとすれば、レンガ積みを塗料で再現せんとした人々がモデルとして思い描いていた建築は、実際の材料流通ルートの外部にあったものということで、あるいはローマ時代の浴場などを参照したとも考えられる。またあるいは、バーブ・アル・マルドゥーム (Bāb al-Mardūm) のモスク (999年) を皮切りに、レコンキスタ後に隆盛するいわゆるムデハル建築へと続くレンガ造建築の遺構が数多く残る、西ゴート王国の古都トレドも、一つの可能性として考えられよう⁷。ただしこれらは、ペニャルバに先行する遺構が残っていないのであくまでも仮説の域を出ない。

既に述べたように、こうした擬レンガ積みなどが描かれたしつくい仕上げの下に用いられていた実際の構造は、スレートと石灰岩を主とした野石積みであるが、これについては近傍に明らかな先行例が存在する。不ぞろいのスレート板と花崗岩ブロックで建設された、ローマ末期のものと考えられるルーゴの城壁である。ヒスパニアにおけるローマ期最後の城壁であるこの巨大構築物の石積みをペニャルバのものと見比べれば、地域的な材料を用いた実用的で経済的なこの工法が、ローマ崩壊後数世紀を経てもその有効性を失わずにいたことがうかがえる⁸。

3. 野石積み、ヴォールト

ロマネスク・ゴシックへ至る中世建築史が、ローマ凋落後の石造建築技術の一義的で単純増加する回復・進化・洗練の歴史でないことが周知となった今でも、サンティアゴ・デ・ペニャルバがその後期に位置するプレ・ロマネスクという概称が包括する時代は、一度失われたローマという目標に向かって技術的に大きな成果を得るロマネスクという脱皮以前の段階と位置づけられることが多い。スペイン初期中世に限定して言えば、パロル、ハウステルド、アルバイターらの研究で明らかのように、粗雑な材でヴォールト建設技術も低かった初期キリスト教建築が、進化して (パロルの「移行期」説)、あるいは東方からの技術輸入によって (ハウステルド)、イスパノゴード建築の見事な切石積みとそこにかかるヴォールトにまでなったというのが、古典的でもっとも広く認められた意見といえよう⁹。

ところがペニャルバの教会堂は、この技術進化史観からすると全く矛盾した建設の様態を持っている。なぜなら、それは石を整形せず用いた野石積みでつくられていながら、全体が構造的困難の多いヴォールトで覆われており、さらに、きわめて特殊な八分ドーム状ヴォールトを含めたひとつひとつのヴォールトが、巧妙に組み合わせられて全体を構築しているからである。

実際のところ、切石の使用とその質が反映しているのは建設自体のレベルではなく切石積みそのもののレベルに過ぎないし、ヴォールトの使用も、構造的要因がその他の経済的・機能的問題を妨げる可能性を考えれば、必ずしも木造天井の進化形とは言えない。特に、大ブロックの切石によるヴォールトは重い上に高価であり、ともすれば原始的な手法であるといえる。ローマやビザンティンのヴォールトによる大空間を覆っているのは、切石ではなく、経済性・施工性・耐久性等で優れるオプス・カエメンティキウム (opus caementicium)¹⁰やレンガである。その点から言えば、ペニャルバが、限定された規模のローカルなプロジェクトとして、ルーゴの城壁でも用いられていた安価な現地の材料を採用したのはある意味当然で、それは古代の切石造

技術の成れの果てではない。反対に、全石造による架構も、ロマネスクあるいはロマネスク的精神の萌芽などではなく、地中海世界の小規模な重要建造物が古代以来いつも可能性として持っていた選択肢の、慎重な適用の結果なのである。

サンティアゴ・デ・ペニャルバの平面は、機能的分割をそのまま構造に反映したようなかたちで、細かいいくつかの室に分割されている(図3)。主部は二つの空間に分けられるが、本論ではこれらを東から内陣、外陣と呼ぶ。主部を挟んで東西にアプスがつき、また内陣両脇に二つの付属室がある。これら全てにそれぞれ独立したヴォールトが架けられているのだが、その内訳は、外陣と付属室のトンネル・ヴォールト、両アプスのドーム状多分割ヴォールト(bóveda de cascos)、そして内陣の正方形平面上に架かる、八つの放射状穹窿とその間の曲面からなる八分ドーム状ヴォールトである。

図3 サンティアゴ・デ・ペニャルバ平面図 (Ángel Fernández Muñoz)

ペニャルバの壁厚は大部分で一定で、約72cmであるが、主部横断方向のスパンは約5mで、スパン対壁厚はおおよそ7:1である。同じくスペイン初期中世の代表的なヴォールト建築と比べてみると、アストゥリアス建築の頂点をなすサンタ・マリア・デ・ナランコ(Santa María de Naranco, Oviedo)が約4:1、西ゴート期とも後ウマイア期ともいわれる常に注目を浴びてきたサンタ・マリア・デ・メルケ(Santa María de Melque, Toledo)は3:1にも届かない。したがって規模の小ささや奥行きの浅さ、構造的単純さを加味しても、ペニャルバの7:1は評価できる数値である。72cmという壁厚は、ヴォールトを架ける建築としては小さいが、木造天井のバシリカであるエスカラーダの56cm、サン・フリアン・デ・ロス・ブラドス(San Julián de los Prados, Oviedo)の64cmより大きく、木造天井の建物との差異は考慮されていたということは理解できよう¹¹⁾。

4. 多分割ヴォールト

両アプスを覆っている、放射状に稜線を持つドーム状多分割ヴォールトは、エスカラーダ、サン・ミゲル・デ・セラノーバ(San Miguel de Celanova, Ourense)など、同時期近傍の建築にも比較的多く見られ、弧を描く内壁面を外部に反映しないそのプランと共に、レオン系のレポブラシオン建築に特徴的な形式

である。現在残る遺構からのみ判断すれば、これはスペインキリスト教建築に初出の要素である。起源については、ミフラーブの影響などが言われるが、半島イスラム建築の遺構にはレオンに先立つ事例は残されていない。いずれにせよ、この時期のドウエロ川流域は、半島のほかのどの部分よりもこのタイプが普及した場所であり、したがってもっとも発達していた場所であったと推測される。

同じように、複数の放射状穹窿とその間の三角形凹曲面の組み合わせで、球面を近似したヴォールトを構成するというアイデアながら、内陣ヴォールトの解決はより独特である(図2)。アプスでは、部分的な円形平面に沿った筒形の壁面上に水平に迫元がまわり、そこがヴォールトの穹窿間の凹凸との接続部となっているが、内陣では、こうしたリング状の迫元でも、トロンプやペンデンティヴでもなく、直接四つの壁付アーチ上に架けられる。八つの凹曲面のうち四つが各辺の中央から、残り四つが隅部から立ち上がり、後者は隅の凹面を反映して前者よりも曲率が大きくなっている。

ゴメス・モレーノは、正方形平面上に壁付アーチを介してドーム状ヴォールトに繋げる手法に関してラヴェンナのガッラ・ブラチディアの霊廟を引き合いに、また、穹窿をもつ多分割ヴォールトに関しては、コンスタンティノープルの聖セルギウス・バッコス教会を引き合いに、この内陣ヴォールトの起源をビザンティン建築に求めた。一方、この時期のスペイン美術に対する同時代のビザンティン帝国の影響について慎重な意見を述べているバンゴは、単に「遠くローマに遡る」とだけ述べている¹²⁾。

ガッラ・ブラチディアの霊廟の上部は、正方形平面の角柱に四方向の裾部を切り取られた半球ドーム状ヴォールト(bóveda vaída)で、球面と角柱側面の交線が壁面上部に壁付アーチとなって現れる。ペニャルバの内陣ヴォールトも同じように壁付アーチから発しているが、一つの球面をベースとしたラヴェンナの場合とは違い、複曲面でできている。

円形や多角形のドームやヴォールトを正方形平面上に載せるという帝政ローマ時代から存在していた発想は、初期ビザンティン時代において、ペンデンティヴ・ヴォールトの普及と連動して発達した。ペンデンティヴの使用自体は4世紀にローマ帝国東部地方で始まったが、必ずしも東ローマのみで用いられたのではなく、それが5世紀初頭には初期キリスト教世界の他の部分にも普及していたことは、マウソレウムなどの作例に見ることができる¹³⁾。

ペニャルバの教会堂のやり方も、正方形の室を、縦横のない集中式のヴォールトで覆うという点では同じだが、複曲面で構成するという部分は、四つの稜線を持つ交叉ヴォールトと、半球状ヴォールトの間に位置する、ある意味両義的なコンセプトが見え隠れする。

後に言及するグルノーブルのサン・ローランの『クリプト』を除けば、このタイプのヴォールトの代表的なものはやはりユスティニアヌス期のビザンティン帝国に多く、前述の聖セルギウス・バッコス教会(536年以前)や、ル・ケフのダール・エル・クス(6世紀)のアプスなどに見られる。しかしながら、6世紀のコンスタンティノープルとチュニジアの建築間の比較からは影響関係が容易に推し量れるのに対し、それらと10世紀スペインのものとの比較は、その歴史的距離に見合った形態的差異を際立たせるばかりである。ペニャルバ内陣ヴォールトは、ビザンティン建築の二つの要素の単純な加算とはとても考えられないのである。

さらに、ユスティニアヌス期の建築は、後期ローマ建築と分類されることもあり、ビザンティン建築固有の様式はむしろその後発達していく。10世

紀のビザンティン建築と同時期のペニャルバとの比較は、6世紀の建築と比べたときより更に形状的差異が拡大しており、伝播の経路とはまず考えられない。

他方、当時のスペイン・イスラム建築では、装飾的なリブ・ヴォールトの様式化が進んでおり¹⁴、アストゥリアスではトンネル・ヴォールトが主流であったから、多分割ヴォールトがレポブラシオン建築に登場した経緯ははっきりしない。しかしながら、この形状はユスティニアヌス期の専売特許ではなく、全く別の時期に別の文脈で現れてもおかしくはなかったと考えられる。先行例は、ゴメス・モレーノ自身も指摘しているように、イタリア半島に残るハドリアヌス期の建築、皇帝のヴィッラやいくつかの浴場 (Baiae, Otricoli など) において確認できる。八角形平面の室に、オブス・カエメンティキウ

図4 バイア (Baiae, Baia) にある浴場の一室のヴォールト
(Adam, *La construcción romana*)

図5 グルノーブル、サン・ローラン教会『クリプト』のアプス
(Hubert, et al., *La Europa de las Invasiones*)

ムで建設され、部分的にレンガ積みで仕上げられたヴォールトは、聖セルギウス・バックスのものよりもずっとペニャルバの形に近い (図4)¹⁵。ユスティニアヌスの建築の時期的先行が、ビザンティン式ヴォールトと呼ぶことを正当化できるならば、これをローマ式ヴォールトと呼ぶことも可能だということになる。

このタイプのヴォールト遺構で最も興味深いのは、グルノーブルはサン・ローラン教会の『クリプト』である (図5)。ロマネスクの教会堂の下部に位置する、ローマ時代のマウソレウムを改築したこの小さな教会堂は、8世紀末から9世紀初頭にかけて最後の改変を蒙っているが、東側アプスの壁付アーケード上の多分割ヴォールト建設はこのときのものと考えられる¹⁶。墳墓を起源としている点は興味深く、初期キリスト教時代に大きなバシリカと並行して存在した、石造天井の小規模な霊廟建築の根強い伝統を垣間見ることができる。

グルノーブルにおける壁付アーチと穹窿・凹曲面パーツの組み合わせ方は、ペニャルバのものよりも単純で、各アーチは各内壁面に、各ヴォールト曲面は各アーチに一致し、したがって、各稜線は各アーチの交点から生じている。レオンのレポブラシオン建築では、サン・サルバドル・デ・パラ・デル・レイ (San Salvador del Palat del Rey, León) の交差部がこれに近く、交叉ヴォールトの要領で十二本のうち四本の稜線がコーナーから生じ、その間に位置する各辺二本ずつの稜線は副次的な性質にとどまっている。一方、前述のようにペニャルバでは、稜線と室の隅部とが一致せず、グルノーブルのシンプルな解決とは一定の距離がある。したがってそこに直接的な相関を見出すことはできないが、ガリアとヒスパニアに共通する建築文化の伝統が下地にあることを見てとることは十分可能である。また、ローマ帝国滅亡以降も、ヒスパニアの地でヴォールト建設技術が失われることがなかったことは、時期的にユスティニアヌス期直後に位置する西ゴート王国時代の建築、そしてアストゥリアス建築がその証左であるから、形態的特殊性を差し置けば、ペニャルバの内陣ヴォールトが実現された背景には、ローマ以来のヒスパニアの石造天井技術・指向があったことは無視できないであろう¹⁷。

5. まとめにかえて

サンティアゴ・デ・ペニャルバの主要なアーチは半円を大きく超える馬蹄型で、イベリア半島のイスラム建築が参照されていたことはほぼ疑う余地のない事実と言ってよいと思われる。ただし、こうした馬蹄型アーチの特徴から、建築全体がイコール「モサラベ」と自動的に分類されてきたのは否定できない。馬蹄型アーチ自体に関しても、もう少し入念な分析が必要であろう。

コルドバの大モスク増築過程につぶさに観察することができる、10世紀以降に顕著な馬蹄型アーチの様式化・装飾化は、ペニャルバでは見ることができない。コルドバでは、レンガと石を交互に配した馬蹄型アーチの使用という当初からの原則を維持しつつ、アーチの上部を区画するアルフィス¹⁸を典型的なファサード処理として発達させ、それと同時に、内輪と外輪の中心をずらし、迫石の収斂点を円の中心ではなく迫元の高さにおき、櫛を直線型アーチとして機能させ、その上部に隠しアーチを配した。これと同時に、瀟洒な馬蹄型アーチは、この隠しアーチの下部を壁面に描いた、完全に装飾的なカムフラージュとなったのである。

ペニャルバの馬蹄型アーチは、こうした構造化と装飾化を同期させるシステムを持っていない。構造としてのアーチの曲線を下方に延長していたイス

パノゴード建築と、手法としては同様なのである。イスラム建築の視覚的要素を、論理を理解することなく模倣しようとしたこの試みは、イスラム建築文化との本格的接触を持つことがなかった者の異国趣味から生まれたのではない。つまり、「モサラベ」建築と言われた建築の影には、実はゲナディウスとその弟子たちのような、非モサラベ入植者の存在があったのではないだろうか。

近年の修復で明るみに出た壁画については、カリフ期の (califal) 絵画様式と述べる研究者もいる。詳細な分析は報告書の出版を待たねばならないが、たとえそうだとすると、サンティアゴ・デ・ベニャルバの建築に、地方化した慣習的な工法で作られた、伝統的な典礼機能のための空間を、同時代的な装飾で覆おうという姿勢が窺われていることに、変わりはないのである。

注

¹ 史料解釈については、ゴメス＝モレーノの解釈の説得力を前に、以降は一部の例外を除いてその解釈に異が唱えられることはほとんどなくなった。例外として Quintana Prieto, A.: *Peñalba. Estudio histórico sobre el monasterio berciano de Santiago de Peñalba*, León, 1963 (1978); Corzo, R.: *Visigótico y prerrománico*, Madrid, pp.92 y 118, 1989; Bango Torviso, I. G.: «El espacio para enterramientos privilegiados en la arquitectura medieval española», *Anuario del Departamento de Historia y Teoría del Arte*, vol.IV, UAM, pp.100-5, 1992 等がある。キンターナは、ゲナディウス、サロモン両者の遺書が示す矛盾と、ゲナディウスのその優越性への確信から、サロモンが建設したのは「家」(domus)だと主張し、パンゴ説(西アプスのみがサロモンによる)を着想させた。しかしながら、同時期 domus という語は、教会または修道院という意味で多くの用例があり、さらに、サロモンの文書内の別の場所では明らかに「修道院」(coenobium)の建設への言及があることから、この説は支持できない。史料分析については拙著 *La iglesia de Santiago de Peñalba*. Trabajo para el Diploma de Estudios Avanzados, Departamento de la historia y la teoría del arte, UAM, 2005, 一章及び補遺を参照。

² ベニャルバ教会堂に関する科学的研究の嚆矢となったのはゴメス＝モレーノである (Gómez-Moreno, M.: «Santiago de Peñalba. Iglesia mozárabe del siglo X», *Boletín de la sociedad castellana de excursiones*, LIV, nº81, pp.193-204, 1909-10)。この大家によるモサラベ建築ヴィジョンは、名著『モサラベ教会堂』(1919年)そして『モサラベ美術』(1951年)を経て、現在でも主流となっている。Idem: *Iglesias mozárabes. Arte español de los siglos IX al XI*, Madrid, 1919 (1975, 1998 Facs.); Idem: *Arte mozárabe*, *Ars Hispaniae* III, Madrid, 1951; Torres Balbás, L.: «El arte de la alta edad media y del período románico en España», *Historia del arte Labor* 6, Barcelona, pp.167-75, 1934; Chueca Goitia, F.: *Historia de la Arquitectura Española: edad antigua y edad media*, Madrid, p.127 y ss., 1965; Fontaine, J.: *L'Art Préromain Hispanique* 2, Pierre-qui-Vire, 1977. このモサラベ史観に対する異議を美術史の分野で唱えてきたのが、Camón Aznar, J.: «Arquitectura española del siglo X: mozárabe y de la repoblación», *Goya* nº.52, pp.206-19, 1963; Bango Torviso, I. G.: «Arquitectura de la décima centuria: (repoblación o mozárabe)», *Goya* nº.122, pp.68-75, 1974; Idem: «Estudio preliminar», en Gómez-Moreno, *Iglesias mozárabes*, Facs., 1998; Idem: *Arte prerrománico hispano*, Madrid, p.182 y ss., 325 y ss., 2001; Yarza Luaces, J.: *Arte y arquitectura en España 500-1250*, Madrid, pp.91-122, 1979 等である。社会史の分野では、古典的な無人化・再入植史観と共に、レオン王国のモサラベ移民のリアリティーを再考する研究が近年顕著なものとなっているが、その研究史は *Actas del VII Congreso de Estudios Medievales* (León, 1999), León, 2001 に詳しい。

³ 本論の副題である工法とは、史料・機能的・美的側面ではなく建設的側面を論じる、という以上の意味は持っていない。施工法という観点で石造建築を論じたものとしては、古典であるシロワジーから現在に至るまで、多くはないがいくつかの論考を見つけることができる。注17を参照。

⁴ 本論では、10世紀スペイン北部で、キリスト教国家の領土拡大と入植に併せて建て

られた建築をレポブラシオン建築と呼ぶ。これは、ゴメス＝モレーノがモサラベ建築と定義づけたロマネスク前夜のスペイン建築のうち、キリスト教勢力側にあるものの総称である。呼称をめぐる先行研究については注2を参照のこと。

⁵ Fita, F.: «San Miguel de Escalada», *Boletín de la Real Academia de la Historia*, t.31, p.470, 1897に Leg(io) VII G(emina) Phil(ippina) という刻印の存在が記されている。他方ゴメス＝モレーノは、これらのレンガを新たに製造されたものと考えた。Gómez-Moreno: *op. cit.*, p.151, 1919.

⁶ 修復建築家であるアンヘル＝フェルナンデス・ムニョス氏に電話で教えていただいたもの (2006/2/6)。2006年2月現在、調査報告書が作成されている最中である。

⁷ 存在自体は、露出していたごく一部分に関するレポート、Menéndez-Pidal, J.: «Las pinturas prerrománicas de la iglesia de Santiago de Peñalba», *Archivo español de arte*, t. XXIX, nº.116, pp.291-5, 1956 などによって早くから知られていたベニャルバの壁画・天井画だが、その全貌は2004-5年の修復調査で初めて明らかになっており、報告書出版が待たれる。マソーテの壁画に関する報告は、Mata, S., et al.: «La restauración de la iglesia de San Cebrián de Mazote», *Bau*, no.7, pp.14-19, 1993 に見ることができる。

⁸ García y Bellido, A.: *Arquitectura romana*, Madrid, p.12, 1929; Arias Vilas, F.: *Las murallas romanas de Lugo*, Santiago de Compostela, p.53 y ss, 1972.

⁹ Palol, P. de: *Arte hispánico de la época visigoda*, Barcelona, 1968; Hauschild, Th.: «Técnicas y maneras de construir en la arquitectura paleocristiana hispánica», *II Reunión d'arqueologia cristiana hispánica* (Montserrat 1978), Barcelona, 1982; Arbeiter, A.: «Construcciones con sillares. El paulatino resurgimiento de una técnica edilicia en la Lusitania visigoda», *IV Reunión d'Arqueologia Cristiana Hispanica* (Lisboa 1992), Barcelona, 1995. これらの学説に対し、ロマネスク以前のスペイン建築にローマ性が一貫して有効であり、従ってイスパノゴード建築も後期古代に包括されると考えるのがパンゴで、注2で挙げた *op. cit.*, 2001 にはその立場が明確に示される。他方、カバリエロらを中心に近年盛んに行われている議論においては、これまで西ゴート王国時代にローマ化した被支配層が中心となって7世紀後半に建てられたと考えられてきたこれらのイスパノゴード建築の建設時期を、イスラム教徒によるヘゲモニー後と読み替え、その良質な切石、特徴的な彫刻などに、シリア・ウマイヤ朝からの影響があったと考える。Caballero, L.: «Un canal de transmisión de lo clásico en la Alta Edad Media española», *Al-Quantara* 15-16, pp.321-348, 107-24, 1994-5. カバリエロらの議論は大変意欲的で興味深いものながら、古典説を覆す説得力を持つには至っておらず、現時点で筆者は、これらのイスパノゴード建築を西ゴート期のもので捉えるべきであろうと考えている。

¹⁰ ローマ時代のコンクリート工事とも呼ばれる、石灰モルタルに、用途に応じてさまざまな骨材を混ぜ込んで打ち込んだもの。特にイタリア半島で、ポツォラーナと呼ばれる火山岩の細粒を用いたモルタルは良質で、施工性・構造的に優れた。

¹¹ メルケに関しては、Caballero, L. y Latorre, J. I.: *La iglesia y el monasterio visigodo de Santa María de Melque*, *Excavaciones arqueológicas en España*, 109, 1980 (planos 25 bis etc.), ナランゴに関しては、Arias, L.: «La proporción áurea en el arte asturiano: Santa María de Naranco», *Revista de Arqueología*, 73, pp.44-57, 1983, ロス・ブラードスに関しては García de Castro, C.: *Arqueología cristiana de la alta Edad Media en Asturias*, pp.456-7, Oviedo, 1995, エスカラダに関しては Gómez-Moreno: *op. cit.*, pp.144-6, 1919 を参照。

¹² Gómez-Moreno: *op. cit.*, pp.199-200, 1909; Idem: *op. cit.*, p.149, 1919; Bango: *op. cit.*, p.333, 2001.

¹³ Ward-Perkins, J. B.: *Roman Imperial Architecture*, Harmondsworth, p.338, 1981; Krautheimer, R.: *Arquitectura paleocristiana y bizantina*, Madrid, pp.280-1, 2000.

¹⁴ 北アフリカでは、初期ビザンティン系の多分割ヴォールトの影響が見受けられる。カイラワーン(836)やチュニス(864)のミブラブ手前のベイでは、レオンの事例とは異なって、ダール・エル・クスのように突出した稜線を見ることができる。

¹⁵ Gómez-Moreno: *op. cit.*, p.231, 1919; Crema, L.: *L'Architettura Romana* (*Enciclopedia classica*, Sezione III, vol.XII, t.I), Torino, pp.339, 413, 476 y ss., 1959; Blake, M. E.: *Roman construction in*

Italy from Nerva through the Antonines, Philadelphia, pp.266-70, 1973; Ward-Perkins, J. B.: *op. cit.*, p.168; Adam, J.-P.: *La construcción romana, materiales y técnicas*, León, p.194, 1996.

¹⁶ Hubert, J., et al.: *La Europa de las Invasiones*, Madrid, pp.97-102, 1968; Durlat, M.: *Des barbares a l'an mil*, Paris, pp.536-8, 1985.

¹⁷ これらのドーム状建設がどのようになされたのか、型枠が使用されたのか、あるいはセンタリングだけの簡単なものだったのだろうか。本論の意図を逸脱するテーマではあるが、参考までに、ベニャルバについては、修復建築家（註6参照）が、「間違いなく」型枠（cimbra）が使われたであろうと述べている。近傍のサント・トマス・デ・ラス・オリャス（Santo Tomás de las Ollas）の類似したヴォールトでも、型枠で用いられた板の痕跡が見られる（Luengo, J. M.: «La iglesia de Santo Tomás de las Ollas», *Archivo Español de Arte*, n° 78, p.135, 1947）。一方、木材の少ない中近東などで実践されていたと考えられる型枠なしのヴォールト施工法についてもしばしば言及されてきた。マンゴー（飯田喜四

郎訳）：ビザンティン建築, p.10, 本の友社, 1999 (Mango, C.: *Byzantine Architecture*, 1978)、ウード・パーキンズ（桐敷真次郎訳）：ローマ建築, p.196, 図 273-5, 本の友社, 1996 (Ward-Perkins, J.-B.: *Roman Architecture*, 1977)、五島利兵衛：ヴォールト殻迫石積み型式の分類と表記法, 日本建築学会計画系論文報告集, 第 353 号, pp.129-140, 1985.7、同：煉瓦造アーチの製作実験, 日本建築学会計画系論文集, 第 519 号, pp.287-294, 1999.5。イベリア半島に関しては, Almagro, A.: «Un aspecto constructivo de las bóvedas en al-Andalus», *Al-Qantara*, XXII, pp.147-170, 2001 を参照。

¹⁸ イベリア半島を中心とする西方イスラム建築で様式化した、開口部アーチ上部に設けられる装飾的な矩形の枠のこと。額縁装飾の表現自体はイスラム教徒侵入以前から半島に存在したと考えられている。

(2005年11月10日原稿受理, 2006年3月9日採用決定)